辞世にみる滑稽（前編）

高橋真紀子

最高の滑稽句で人生を締めくくりたい。そんなことを考えている滑稽俳人は多いのではないでしょうか。死を笑いに昇華させるユーモアと度胸を持つことはとても難しい。でも調べてみて、歴史に名をなす文人墨客が、滑稽な作品をさまざま残していることを知りました。辞世は和歌で詠まれたものも多いので、この際「滑稽歌」も交えながら、迫ってみたいと思います。

例えば、戦国時代の連歌師、山崎宗鑑の作は「宗鑑は何処へと人の問ふならば ちと用ありてあの世へといへ」。よう（出来物）がもとで亡くなったという宗鑑は「用」をかけた滑稽歌を詠みました。

朝顔の句で有名な江戸期の俳人、加賀千代は「月も見てわれはこの世をかしくかな」。死を前に、静謐で堂々とした一句を残しています。

富嶽三十六景などで知られる浮世絵師、葛飾北斎は「人魂で行く気散じや夏の原」と、何とも豪快な詠みっぷりです。

小林一茶は「ああままよ生きても亀の百分の一」。人は生きられても百年。生き物の名句で知られる一茶らしい辞世と言えましょう。

そもそも辞世の定義とは何でしょう。「人生最期の句」というだけでは足りないと言うべきでしょう。辞世句の代表格、松尾芭蕉の「旅に病んで夢は枯れ野をかけ廻る」は、辞世ではなかったとの見方があります。芭蕉は、旅先の大坂で病に倒れ、この句を詠みますが、詠んだ後に推敲を試みたそうです。芭蕉にとっては、結果的に最後になった句が、辞世にされてしまったことになるかもしれません。何だかその状況の方が滑稽にみえま

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

す。

この点、金子兜太先生は本の中で次のような見方を述べておられます。暮らしを見直したり、生涯を振り返ったり、死そのものを見詰めている今の心境を述べようとしたりして作る句も辞世とする広い捉え方なら、この句を辞世と呼んでもよいと。

「その時」はいつ来るか分かりません。日常の中で、死と命を見つめた「辞世」を作っておくのも、良いかもしれません。

ちなみに、西行の「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」は、辞世の名歌として知られていますが、実際に亡くなったのは詠んでから約十年後なのだそうです。でも、歌った通りの時節だったとか。西行もなかなかの滑稽歌人、というと言い過ぎでしょうか。

参考文献　「魂をゆさぶる辞世の名句」（成美堂出版）▽「元気なうちの辞世の句３００選」（中経出版）▽珠玉の日本語・辞世の句（ＰＨＰ研究所）など。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。